

「プランゲ文庫」所蔵資料にみる大学の歩み

—別府女子専門学校から別府女子大学へ—

吉岡 義信

はじめに

平成 21 年度より教養科目の中で「大学史と別府大学」という講座が開講し、これに関する資料の問合せが多くなってきた。しかし、図書館で所蔵している資料には限度があり、特に戦後間もない頃のものには皆無と言ってよい。この稿ではレファレンスの意味も含めて大学の歴史を調べることにした。

平成 20 年度の大分県大学図書館協議会総会における講演で、「プランゲ文庫」についての話があり、この中に大分県関係の資料も含まれていることを知り、もしかすると大学に関係するものも含まれているのでは、と思っていたが調べる術がなかった。そんな折昨年、二〇世紀メディア研究所から「占領期新聞・雑誌情報データベース」が公開されていることを知り、早速検索してみると「別府女専新聞」の存在が明らかになったのである。何とか入手できないものかと調査したところ、国立国会図書館がマイクロフィルムを所蔵していることがわかり、複写請求をして取り寄せることができた次第である。

残念ながら全て揃っておらず、第 2、3、4、7、8、9、10、11、13 号のみである。各号は表裏二面の一枚ものとなっている。第 2 号の欄外に「別府女専新聞第一号二部をお送り下さい。三号以下も二部宛お送り下さい。」とあることから、全てのものを二部宛提出させていたのであろう。また第 9 号の「新聞の意義を問ふ—旧委員第三者の立場語る—」と題した中に「次に我が別府女専が、二十二年七月十日に創刊した。(中略) 創刊当時は、各大学の新聞を手本に各教授の論文を、二面全紙に掲載し、女専といふプライドを新聞によった。」とあり、創刊号の出版年と内容を推測できる記事が掲載されている。

各号ともに当時の大学を知ることのできる大変興味深い内容のものばかりであるが、今回はこの中で、女子大学への歩みに関するものを主に調べてみることにした。また、「プランゲ文庫」による他の資料も参考に調査することにした。

なお、掲載記事については、旧漢字を新漢字に訂正したほかは、誤字、送り仮名なども原文のままとした。また判読できない文字は□で表示した。

プランゲ文庫について

連合国軍総司令部(GHQ)は昭和 20 年 9 月から 24 年 11 月まで、検閲のために全国で発行された雑誌、新聞、図書などありとあらゆる出版物を強制的に提出させていた。これらの刊行物や関連資料の全ては、GHQ の中の民事検閲局(CCD)に保管されていた。GHQ 参謀第二部戦史室主任歴史課長であったプランゲ(Gordon W. Prange)博士は、これらの歴史的資料価値に注目し、自分の勤務先であったアメリカのメリーランド大学への移譲に尽力、その努力が実り保管されることになり、1978 年「プランゲ文庫」と称されるようになった。

「占領期新聞・雑誌情報データベース」について

占領期メディアデータベース化プロジェクト委員会が、科学研究費補助金を受け、プランゲ文庫の全雑誌の目次とその筆署名、掲載号、ページなどの情報を入力、データベース化した。記事タイトル数だけで 196 万件にのぼる。アドレスとパスワードを入力すれば、誰でも無料で情報を入手でき、この時期を研究する者にとっては、恰好のデータベースである。(以下「データベース」と称する)

別府女子専門学校の開設

昭和 21 年 1 月 26 日付大分合同新聞（データベース）には、「**新学期から開く/本極になった別府女専創設**」との記事タイトルがあり、大分県立図書館でマイクロフィルムを見ると次のようにあった。(以下合同新聞の記事はマイクロフィルムによる)

大学、専門学校の地方分散が叫ばれ県下にも佐伯市に東京農業大学分校設置が伝えられ、中津市にも一部識者の間に外国語学校設立の声が起ってゐる時、別府市に別府女子専門学校が創設される、財団法人豊州高等女学校校長佐藤義詮氏が設立者で二十四日県經由文部省に認可申請書を提出した、既に別府中学の焼跡八千七百坪を五十万円で買収を終り、建坪一千坪の校舍施設も設計済みで近く後藤組の手により着手し、その一部は四月の開校（予定）までに出来上る、従来県下の女学校卒業者で上級学校進学者は毎年四百名を下らず、その大部分は東京、大阪などに遊学してゐたが最近の食糧事情などから地元設置願望の声が高く、併せて九州各県からの入学者を狙ったもので、初年度は社会科五十名、文科五十名を募集、佐藤義詮校長をはじめ教授講師連の陣容も決ってをり女学校も併設する。

この後の経緯については『別府大学の三十年』や『学校法人佐藤学園の八十年』に記載されているので省略するが、同年 5 月 1 日、別府女学院が別府市鶴見園に開校した。

同 5 月 16 日付大分合同新聞（データベース）には、「**別府女学院入学式**」の記事タイトルがある。

県下唯一の女専別府女学院の入学式は、十五日午前十時鶴見園跡の同学園で行われ、佐藤学院長と新入生総代三好邦子さんの挨拶、来賓の祝辞があつて閉会した、戦前観劇と温泉で別府の代表的歓楽地であつた鶴見園は自由を謳歌する学園に変貌し英文科、国文科、社会科百七十名の女生徒達は日本再建の舞台に立つ日の希望に輝いてゐる（合同新聞）

翌昭和 22 年 3 月、専門学校令によって別府女学院を別府女子専門学校と称することが認可されている。

●新制大学昇格への動き

昭和 22 年 8 月 22 日第 2 号

一面トップには「**新制大学昇格問題に就き全国高専校長会議開催 私学関係校の発言活発**」の見出しがあり、「六・三・三・四学制改革に伴ふ、全国高専校長会議わ七月二十三日午前九時より、東京女高□□□に於いて開催される。(中略)本校に於いても、校長差支のため庶務主任友田享史教授が代理出席する。」とある。

昭和 22 年 11 月 26 日第 3 号

これも一面トップで以下の見出しとともに、新学制に伴う創立者の大学観が述べられている。

「人間形成としての大学」佐藤義詮

六・三・三・四制という新しい学制に本校も二十四年度からその適用を受けることになると考える。この最後の四ケ年が大学に当る訳であるが(中略)若し大学で勉強することを国民が好むならば、全国に何百の大学があっても差支えがないではないか、と私は思ふ。しかし学問のない大学は自然に淘汰されて仕舞うであろう。新しい制度に就いて、私は学生諸君ばかりからでなく、市民達からも区々別府女専はどおなるかという質問を受ける。その度に私の考えることは現在の校舎設備というものを、大学設置委員会の規定する案に近ずけることによって達成される形式的な昇格案と、私自身の自由な構想一寧ろ、空想と呼んだ方がいい私の「夢」といったものが二つある。前者は、校地、校舎、資金の問題で一見困難にみえても、案外容易な問題であると思ふ。後者は学問と学生を学校の本質と考えることであって、私の人間形成の理想のあるところのものである。校舎の理想のない前者は考えることができない。校長や教授が大学昇格のために寄附金集めに奔走するのは、学校的美談であるかもしれないが、滑稽である。それよりも市民、学生諸君をここを事実上大学と考えさせる学問と文化のゼミナールとしたいものである。これは決して、不可能に対する弁明でも泣きごとでもない。私の空想が学生の空想となる日が来ればきっと達成されるに違いないことが保証されるからである。

昭和 23 年 1 月 21 日第 4 号

二十三年度高専入学者選抜規定(見出し)

旧臘二十三日九大に於て“二十三年度高等専門学校入学者選抜”に関する会議があり、本校から折田教授が出席された。側聞する所によると、今度の学制改革によると、入学する生徒に三通りの取扱いがなされる。イ現制のままで従来通りその学校を卒業する場合、ロその学校が新制の大学になる際その大学又は他の大学の相当学年に編入せしめられる場合、ハその学校が新制の大学になる際その大学又は他の大学への優先的入学を認められず、新制高等学校の卒業者と同一条件で改めて入学試験を受けねばならない場合である。今年までは、専門学校として生徒募集をなす事が出来、その入学者は専門学校卒業が出来るわけである。今年度に於ける高等専門学校の入学資格は、女子は高等女学校卒業者に限られて居る事は今までと同じである。入学審査方法としては、特に今年度から進学適正検査を

する。これは全国一斉に同一の問題を文部省から提示され、大分県の人ならば、東京の学校に受験する生徒でも大分県で受ける。併し本校の如き私立は各学校で、別に問題を考えて行ふ。(中略) 同試験の期日は、官立では文部省の支持があるが、本校では大体三月二十日頃から始める事になるだろう。

次の記事では、文部省の事務次官が来校した際の昇格問題に対する答弁と、経営改善に関する案およびこれに対する佐藤義詮校長の意見が述べられている。

四年制大学か三年制大学か 暗々裡に四年制大学への努力か (見出し)

六・三・三・四の学制が□々と実現され、新学年度、高等学校昇格問題が終ると、愈々最後□の大学へと移る。我が校は、創立年まだ浅い為、問題は実に大きい。長い歴史をもつ専門学校でさえ、資金問題その他で、果して四年制の大学に昇格できるか否か問題にされている時、幸い文部省専門教育課の坂本事務官が来校されたのでこの問題に関しその考へをうかがってみた。

「文部省としては専門学校では来年は従来のまま一年生を募集することとし、従ってその一年生は専門学校に於る最後の生徒として取扱はれるわけである。次に大学昇格に就ては三年制の大学案も出ているが、それよりも特に二年制の大学即ちジュニアカレッジの案が考えられこれは普通の四年制の大学とは違い大学を出ても学士号は取れない。現在ある専門学校の全部が全部大学に昇格するわけではなく、それに対して文部省としては、標準的具体案ができる筈であるが、現在ではまだ出来ていない。若し四年制の大学に昇格することができぬならばジュニアカレッジに一応落着き、更に年を重ねて設備を整えば、新たに四年制の大学へ昇格するなどの事も考えられると思ふが、今の所文部省としては確定していない。」と語った。これに対して校長は「他の専門学校は昇格資金募集を始めているが、本校では生徒に多額の金を負担してもらふと父兄の困窮を招くばかりであるので、そう云ふ方針はとらない。又豊州高女を高等学校にする考えであり、その為にも是非本校を大学にしたいと思ふ。」との意見を述べる。話は転じ、新しく専門学校になった諸規定について語られる「新しく専門学校となった時には、第一回生は文部省から国家試験があることになっている。そこでこの学校も来年度頃迄に、それに対する準備をする事が必要である。その試験の結果その学校の標準といふものが定められる。」と述べその他二三問題を交し、校内を一巡し、二階のベランダに出て眺める。東は□の□な別府湾、西は南北に連る由布連山その間にほのぼのと立上る湯煙りの大別府を見下して、事務官は「環境としては大変良い所だ。ともするとはなやかにうかれそうになる泉都別府の中心街をはなれ、波静かな別府湾を眺め、後ろに由布の峰をのぞむこの高台は、教育地としては最適の場所だ。」と感嘆の声をもらされる。次に学校の敷地及び校舎の設備等の校長の説明が終り、経営の細部へと話は進む。事務官は「この学校は比較的生徒数の少いに拘らず各科それぞれの教授を占有しているのは、私立学校としては経営が困難であろう。この打開策として、他の女専の様に別科を設け、それには家事、洋裁等を教へ、期間も一ケ年にして経営を楽にするか、

別府市内に分教所を作る様にすれば、生徒も多数集まると思ふ。」と述べたのに対し、校長は「学校の内容としては、理想主義だと思っている。先のような方法も心得ているが、私の方針としては、高等的、理想的であり、あまりに現実的、実用的であることは好まない」と堂々校長としての抱負を語った。

●別府市による買収計画

昭和 23 年 3 月 6 日付大分合同新聞（データベース）には「別府に大学/別府女専を買収して」とのタイトルがあり、記事内容は次のように別府市が買収計画を進めていたことが伺える。

別府市教育委員会は五日午前十時市会議室で開き、市内北石垣別府女専（校長佐藤義詮氏）を市に買収して大学昇格運動を進め男女共学の総合大学を設置するため、八日各委員が同女専の実地調査を行い所有と売買交渉をすすめるが市当局では買収費の財源を考究中（合同新聞）

昭和 23 年 5 月 25 日第 7 号

この号は紙質によるものか、裏面の文字が透けて写っているため、非常に判読しにくくなっている。

第二回開校記念日を迎ふ（見出し）

文化国家□□ののろしが上るや、別府女学院わ鶴見園にその先駆者の如くにスタートしてから早や三年目を迎へ、五月十五日、第二回開校記念日を迎へるに至った。□□□□の□の街々を雑木林を向うに見る石の校門にわ“別府女子専門学校”と、小ぢんまりとした、門標が今日を記念するが如くくつきりと浮び上っている。左右にわ新緑の山野を、眼下には碧□の海を抱きクリーム色の校舎わ、平和そのもの表わす様に立っている。

とあり、この下段に「**華やかに記念祭開かる**」の見出しでその模様が述べられている。

新入生を迎えて入学式挙行（見出し）

去る五月一日（土曜日）当別府女学院第三回入学式は、新入生徒四十名を迎え当校ホールに於いて挙行された、開会の辞、校長先生のあいさつ、各教授講師の紹介、在学生代表の祝辞等あり特に校長先生の新入生への言葉は感銘深いものがあつた。創立以来二箇年、種々なる悪条件を克えて新しき学園創造への道を歩みつつ□□□□□生徒に□□てこの日を迎えた事は、まことに喜ばしい。大学昇格をめぐって経済的難問克服に、内容充実に今年は苦難の一年であるに相違ない。しかし明るい新入生の顔、あおい海、みどりの山野、今日の入学式はすべて希望に満ちて、力強い一歩をふみ出した。

昭和 23 年 6 月 23 日第 8 号には関連の記事は見られない。

昭和 23 年 7 月 25 日第 9 号

次の記事は編集部特輯とあり、かなり長文であるが草創期における教師、学生の学問に対する考え方、情熱といったものが読み取れるので、主要な部分をあえて掲載した。

発刊一週年を迎ふ 新しき思想の生誕 社会に学ぶ一年（見出し）

（前略）私たちの学校が創立されたのは実に終戦後のことに属する。この真実の意味は、学校の創立理由、従って又存在理由そのものが終戦後日本の新しい理念に基いてなされているという事にこそある。具体的にいって、教授自身の側において学問を出来上ったもの、既製品として、それを切盛りしよう等いう安易□□な空気は微塵もなく、教授自身がその一時間々々の講座を自己の真摯な連動と考えている「或る一時間に与えられた特定の講座というものは繰返そうとしても繰返せないものだ」とうした教授の自覚せる言葉が私たち学生を如何に□□し反省せしめることか。ギリシア哲学専攻のわれらの佐藤校長自身が「発生時の姿における思索」を常に勧めて止まない。斯くして私たちの学んだ全部を貫くものとは「考えること。正しく考えること」の一語に尽きる。自ら考える頭をもつこと。確かに人間はややもすると、既成概念のとりこになる。（以下略）

「学園メモ」の欄に「6 月 29 日校長大学昇格申請の為上京」とある。

●別府女子大学の構想～太平洋大学～

昭和 23 年 9 月 25 日第 10 号

文化の殿堂 別府女子大学誕生？ 大学昇格申請を終る（見出し）

新学制六・三・三・四の学校系列に於て、最後に残されたのが、四の新制大学の問題である。官公立の大学、高専は国家財政の影響もあって、地域的に、統合され、やや落ち着いた模様であるが、私学たる本校では地域的に最寄の女専がない為、単独で、大学申請といふことになり、別個に文部省で考慮された三ヶ年大学と、在来の四ヶ年大学のいずれかを検討されていたが、去る七月二十日迄の本年度大学申請には四ヶ年制、文科系の単科、女子大学を申請した。本校のこの申請は、全九州私立六校の中の一つで、女子大の単科四ヶ年も、ただ一つの存在であり、可成新制大学への昇格可能性は強いと主観的に見え様。

別府女子大実現を佐藤校長に聞く（中見出し）

問 別府女子大学設置の原因、動機は？

答 新学制から来る。当然な専門学校の採るべき手段であって、動機なんてものはない。

問 別府女子大学の構想は？

答 いつか人間形成としての大学といふので新聞に投稿通りである、男女共学案もあるが、女子大の意義云々にかかわらず、女子としての特殊性を生かしたい。つまり、女子には未開拓な分野から女子のみを対象とする、特殊なものの生誕もよいと思ふ。又いわゆる何々大学といふ、尊厳的、権威的な大学の存在よりも、そこが人間形成への学問をするところであれば、もうすでに字づらからする権威を有すると思ふ。とにかく私は別府女

子大云々といふ四角ばった構想は持っていない様だ。

問 しかし学校行政としての運営方針は何か？

答 構想の一部かも知れぬが、文学に限らず、広く文化としての立場から、一般教養科目には、経済、法律、社会学、自然科学等も含まれる様な講座内容とし、これらの過程は全科合同でなし、いよいよ専門科程を、経済、英文科は、別府女子大で、国文科は日田分校（将来の話だが）でおへる様にしたい。又別府女子大では文化範囲が狭く、地域的に止まるおそれがあるから“太平洋大学”とでもして、私の友人エスポジト氏と連絡し、ハワイ、米国等の大学学生の交換もなしたいと思っている。大学の学校行政の意義は、人間形成に対する智識の尊敬といふ社会人の支持によることにある。それが、地域的に支配されては無意味だと思ふが。

問 現在の官公立大学・高・専の合併案について？

答 色々量と質が問題とされている様だが、学問をするという本質にもとづいた大学が出来るのなら、何百出来ても、国民の、大学で学問をしたいという熱望に応じて、設置してもよいと思うが、現在の国家経済ではとても難かしい。合併も学問的立場の不自然が出て面白くない。量とか質のこともいわゆる学問の権威の問題で、大学の機関は人間の意識を高める一手段となるもので、客観的に批判は出来ない。

問 最後に別府女子大昇格に際して？

答 可能性は強い、今少し、地元民の熱がほしい。私としては、私の自由な構想を学生が同じく夢にもつ様になり、形式的な昇格案と相対して行ければ、最も有利な昇格の因となろうと思っている。

●将来は経済学部を設置し総合大学へ

昭和 23 年 10 月 25 日第 11 号

別府女子大の構想 単科大学として イギリス・アメリカ文学科を設置す（見出し）

本校の場合、専門校より新制大学昇格のため、七月中旬、大学設置申請書を文部省に提出、注目視されていたが、この程、書類審査には無事通貨し、後は設置委の現口視察を待つのみとなった。ここにその新制別府女子大の構想を、申請書類より得て概要を発表することにする。

1. 目的と使命 学校教育法第五十二条の規定に依り、女子の教養を高めると共に文学に関する知識を教授研究し、世界文化の昂揚、人類の福祉に貢献することを目的とする。
2. 名称 別府女子大学
3. 位置 別府市北石垣円通寺八二番地
4. 校地 総坪数一一四六・三坪
5. 建物 総坪数九二八・九坪
6. 図書、標本、機械器具設置 現在設置せるものに寄附により、完全なるものになる。
7. 学部及学科の組織並びに施地 文学部 イギリス文学科、アメリカ文学科の二科と

する

8. 学部別学科目

講座概要

一般教養科目人文科学（哲学、論理学、宗教学、倫理学、心理学、美学、音楽、国文学）社会科学（法学、経済学、歴史学、社会学）自然科学（数学、物理学、化学、地理学）体育

一般専門科目欧米文藝思潮、文学研究法、言語学、東洋文学、神話学、美術史、音楽史、演劇論、比較文学、文学概論、ギリシヤ語、ラテン語、ドイツ語、フランス語
イギリス文学科（特殊専門科目）英文学史、文芸批評史、詩学、シェクスピア研究、音声学、古代中世英語、英米文化史、アメリカ文学、文章論、英書講読、演習
国文学科（特殊専門科目）日本文学史、日本詩歌論、日本小説史、日本演劇史、国語学、中国文学、民俗学、文章論、国史、国語講読、演習

9. 履修方法及学位授与概要

イ. 一般教養科目は主として、前二年に履修せしめる

ロ. 専門科目中、基礎学科は一年度から履修せしめ、逐年之を増加せしめる

ハ. 卒業論文は最後年度に於て作成提出せしめる。尚大学学則によると、学生は四ヶ年に於て、本学所定の学科目中一般公養課目については、外国語を含めて人文・社会・自然の各学科に亘って、夫々二科目以上（合計十科目以上、専門科目については、十五科目以上及体育を履修し、一般教養科目については、四十単位以上、専門科目については、八十単位以上体育については、四単位を取得しなければならない。

ニ. 学位授与は、四年以上在学して、学士号授与に関する規定の科目試験に合格して、百二十単位以上取得し、更に論文試験に合格した時学士試験に合格したものとする。この合格により、文学士と称することが出来る。

10. 職員組織 学長 教員（専任）二〇 兼任十三 職員一〇

11. 学部及学科別学生定員 学部百六十名 イギリス文学科八十名 アメリカ文学科八十名

12. 設立者 財団法人別府女子大学

13. 維持経営 授業料、寄附による。

14. 大学開設の時期 昭和二十四年四月

以上が概要であるが、経済学部の設置は、単科文科系大学申請なので、表面化されていないが、専門学校の継続される間は存続し、将来は経済学部も設置し、総合大学化せしめて海外の大学の教授、学生の交流も行ふことに決定されている。又異彩を放つと思はれるのは、体育と物理学とタイアップし自動車科を設置し、それを履修単位にも入れようと計画を進めていることである。

昭和 23 年 11 月 25 日 第 13 号

実現目指す別府女子大学 但し地元民の熱意如何！！（見出し）

「＝既報＝別府女子大学昇格申請の概要によれば」とあり、以下の内容は前号掲載のものと重複するので省略する。続いて「本学の目的と使命を記すれば、女子の教養を高めると共に文学に関する知識を教授研究し、世界文化の昂揚人類の福祉に貢献するといふことになっている、がしかし単なる希望に終らぬ様にしなければならないのである。新教育制度に依る、教育の地方移□が何故問題とされるのか、一つは地方文化が低く、たとへ、地方色が教育にもまれて、地方的な地方民の親しまれる教育が出来たとしても、それが何の進歩もなく、却って過去の□□をのみ□□様な、いまだに残存している封建思想は、新しく芽生え様とする小さき者をいたづらに倭しゆくせしめる様な結果も予想されぬではないからである。しかしながら、かような消極的□りよ、いはば無責任な態度でもって、地方文化人の都市集中がはげしくなり、地方が中央集権的なものに、常に圧迫を受けている様では、文化の昂揚など思ふだに困難なこととなってしまうであらう。かかるとき、本校の大衆□□はあらゆる苦難を克服し、ただひたすら、地方文化向上のために、否、大学所在位置たる当地の国際観光都市という名に恥じぬために、その申請急ぎ完了し、ここに一次審議、二次審議と、申請書類の無事通過をし、最後に三次審議（一月中）の結果を待つのみとなったのである、一大学をも有せぬ国際都市の存在は、如何に非文明のありあわせ主義、かつての形式主義を物語るものか、又世界的平和を愛する人類にとその意識の昂揚をなさうとする人々の心意気に於ても、これらのことは十分に熟慮すべき事柄であると思はねばならない。そして一日も早く、別府女子大が実現出来る様に人々の意識を高潮せしめたいものである。

同年 12 月 4 日付大分合同新聞（データベース）には、「別府女専の文化祭」とのタイトルがあり、「別府女専の大学昇格資金募集文化祭は、本社後援で四日昼夜二回（正午と午後六時）市公会堂で催す、詩人草野心平氏作詞の新作別府女専校歌を発表、合唱、ピアノ独奏、演劇「夜叉王」「真夏の夜の夢」などがある」（合同新聞）とある。これまでの記事の中にも度々資金難のことが見受けられたが、これは資金募集の一面が伺える記事である。

●新制大学の認定不適合

昭和 24 年 2 月 11 日付大分合同新聞（データベース）には「別府女子不合格」とのタイトルが見られる。記事には「新制大学審査終る 認められたもの七十九校」との大見出しで「大学設置委員会では昨年八月以来今春から発足予定の官公私立新制大学申請二百十九件の審査にあたってきたが、去る七日から九日まで三日間開かれた同委員会第七回総会で審査魅了を除き公私立大学百十三大学を上程（中略）また不適合となった学校は二十四年度からの開設が不適合なのであって二十五年度から開設されるか、あるいは二年制の大学としてのこるなどの救済方法が考えられている」とあり、続いて「別府女子不合格」の中見出しで以下のようにある。

九州関係の開設適当不適當校名つぎのとおり

△ 二十四年度より開設を適当と認められたもの【公立】県立鹿児島（工）【私立】なし

△ 昭和二十四年度より開設を不適當と認められたもの【公立】北九州【私立】別府女子、海星学園（長崎）、久留米、熊本文科、北九州法科

また同年2月26日付九州タイムズ（データベース）には、「迷う受験生/見当つかぬ新制大学」とのタイトルで、「先に新制大学第一次認定で北九州法科大学、久留米大学、別府女子大、熊本文化大学が不適當となり、その後第二次の認定もおこなわれないため」とある。

以上のように、昭和24年段階では女子大学開設には至らなかったことが分かる。『別府女専新聞』は昭和23年11月の第13号までしかなく、プランゲ文庫も24年11月までしかないので、その後の経過を知ることは出来ないが、『別府大学の三十年』や『学校法人佐藤学園の八十年』によると、昭和25年3月別府女子大学の設置が認可されている。

（よしおか・よしのぶ 別府大学附属図書館）

